

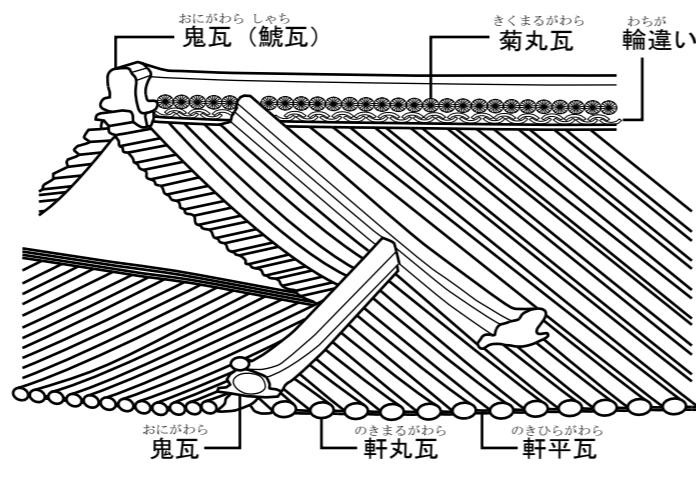
3 出土遺物

肴町向櫓の周辺からは、大量の瓦が出土しました。まだ整理中ですが、総重量は4トンを超えるようです。これは櫓の建替えの度に、建替え前の建物に葺かれていた瓦を周囲に投げ捨てていたことによるものです。瓦が廃棄されていた土層を観察すると、おおよそ3層に分かれるのが確認されたので、櫓の建替えは3度あったと考えています。

また、堀田家の家紋である木瓜文のモチーフをかたどった瓦が、他の櫓に比べて多く出土しているのが特徴です。文献の記録には、堀田家の時代にこの櫓の修理や建替えを行ったような記録は存在しません。しかし、堀田家の時代に建替え、あるいは大規模な修理を行ったのは間違いないでしょう。



本瓦葺き 平瓦と丸瓦を交互に組み合せて葺く、日本古来の葺き方



一屋根瓦模式図



軒丸瓦 (江戸時代前期)

軒丸瓦 (江戸時代中期)

軒丸瓦 (堀田家紋・江戸時代幕末)

軒丸瓦 (江戸時代幕末)



軒平瓦 (江戸時代前期)



軒平瓦 (江戸時代中期)



軒平瓦 (江戸時代後期)



軒平瓦 (江戸時代幕末)

史跡山形城跡 ニノ丸土塁（北東部）発掘調査現地説明会資料

平成29年9月9日（土） 山形市教育委員会 社会教育青少年課

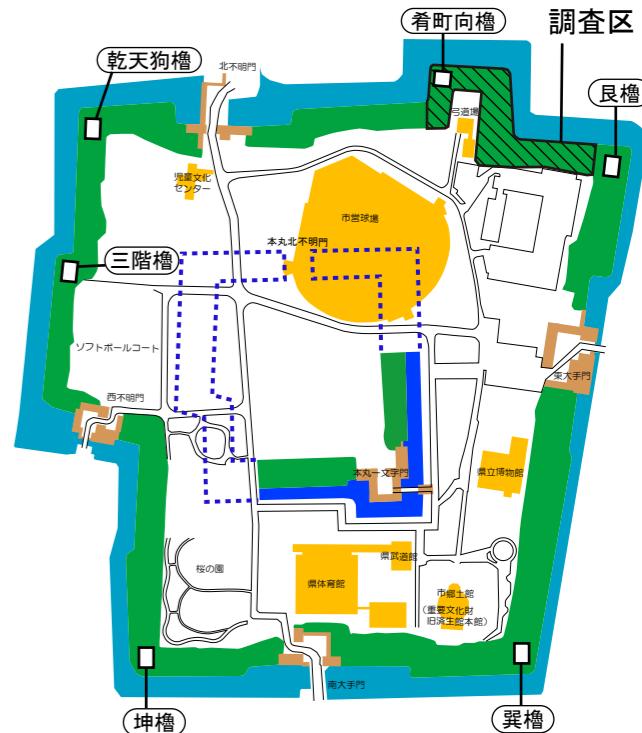
調査要項

遺所 跡 調 査 調 査 遺 時 遺 遺	跡在 番号 期間 積因 別代 構物	名地 名 地 原種	国指定史跡 山形城跡 山形市霞城町（霞城公園） 1番（山形県遺跡地図） 平成29年5月12日～10月31日（予定） 約400m ² 史跡山形城跡（霞城公園）ニノ丸土塁園路整備事業 城郭（近世城郭） 近世 石垣、土塙礎石など 瓦、陶磁器、金属製品など
調査事業の主体	調査実施の機関	調査担当	山形市公園緑地課 山形市教育委員会 山形市教育委員会社会教育青少年課
調査担当	調査担当	調査担当	山形市教育委員会社会教育青少年課

1 概要

山形城跡は、最上義光が拡張整備したといわれる本丸、二ノ丸、三ノ丸からなる平城です。現在、二ノ丸から内側は霞城公園として憩の場となっており、昭和61年国史跡指定を受けてから整備が進められ、二ノ丸東大手門や本丸一文字門石垣・高麗門などが復原され新たなシンボルとなっています。整備は引き続き行われており、今年度は二ノ丸土塁を発掘調査しました。

江戸時代には、山形城の二ノ丸土塁に土塙が廻らされ、6カ所の櫓が築かれていました。今回の調査区は二ノ丸北東部に位置し、肴町向櫓（さかなまちむかいやぐら）があったことが確認されています。当時、櫓から見渡せる城下北側に肴町が所在したので、この名称があります。また、土塁の上に廻らされていた土塙の礎石も、良好な状態で検出されました。



歴代藩主年表

明治 二年	弘化 二年	明和 四年	明和 元年	延享 三年	元禄 十三年	元禄 五年	貞享 三年	寛文 八年	慶安 元年	正保 元年	寛永 十三年	元和 八年	元和 五年	慶長 五年	和暦	
一八六九	一八四五	一七八七	一七六四	一七四六	一七〇〇	一六九二	一六八六	一六六八	一六四八	一六四四	一六三六	一六二二	一六〇〇	一三五〇	西暦	
水野忠弘	水野忠精	秋元朝	秋元久朝	秋元永朝	秋元涼朝	幕府領 (大給) 秉佑	堀田正亮	堀田正虎	(奥平) 松平忠雅	(奥平) 松平直矩	堀田正仲	(結城) 松平忠弘	(結城) 松平直基	奥平昌能	幕府領 保科正之	鳥居忠恒
五万石	六万石	六万石	六万石	一〇万石	一〇万石	一〇万石	九万石	十五万石	二十万石	二十万石	二十二万石	五十七万石	五十七万石	斯波兼頼 最上義光 最上家親 (義俊)	藩主	
															石高	



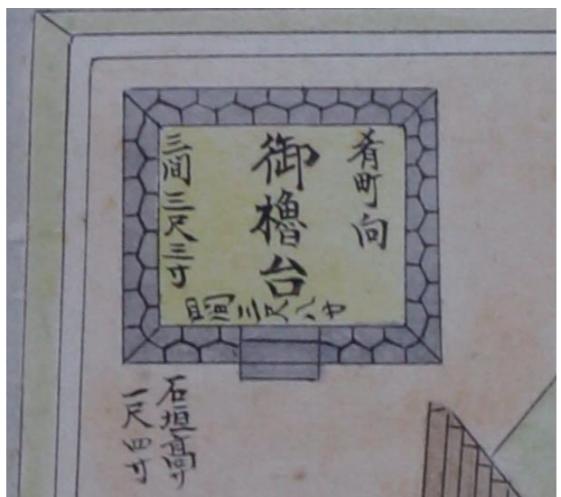
1 着町向櫓石垣（さかなまちむかいやぐらいしがき）

着町向櫓の櫓台となる石垣が検出されました。ここには、江戸時代の城絵図によると、二層の櫓がそびえていました。検出された石垣の規模は、東西約 8.5m、南北約 6.5m で、南側に雁木（がんぎ）と呼ばれる階段が設置されていました。

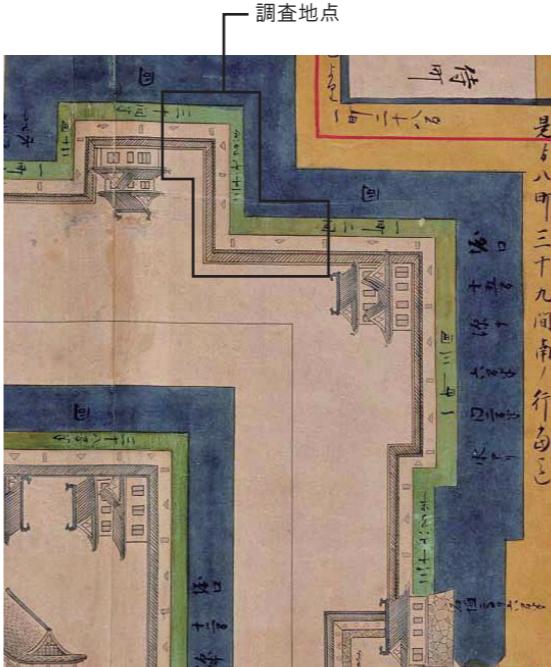
石垣の築造年代は、土墨の形成が元和 8 年（1622）に最上氏が改易され鳥居氏が入部した際の改修によるものなので、それと同時期であると考えられます。

石垣の高さは、約 2 m あったことがわかりました。ただし、時代を経るごとに石垣を埋めるように周囲が整地され、幕末には地表面からの高さは 40 cm 程度になっていました。

現地表から約 40 cm 下から、軒丸瓦と軒平瓦がまとまって出土しました。軒丸瓦の文様に堀田氏の家紋である堅木瓜文が使用されているので、堀田氏の時代の瓦であるとわかります。軒丸瓦の文様部が外されてたり、はがされているので、堀田氏の次に山形城に入った大名により屋根から降ろされた瓦であると考えられます。



秋元氏時代城絵図にみる着町向櫓（郷土館蔵）



江戸時代前期の土塙（正保城絵図より）



2 屏風折れ土塙（びょうぶおれどべい）の礎石

屏風折れ土塙とは、所々鋭角な折れ曲がりをもつ土塙のことです。土塙には穴が開いており、ここから攻めてきた敵に対して身を隠しながら弓や鉄砲で攻撃します。通常の直線的な土塙では正面は見やすいですが、左右が死角となり敵を狙うことができません。その欠点を解消したのが、屏風折れ土塙です。折れ曲がる部分からは、左右に対しても敵を攻撃することが可能となります。

しかも、屏風折れ土塙の礎石は 2 時期あることが確認されました。新しい時期は城の外側（堀側）に折れ曲がる外折れ式で、古い時期は城の内側（二ノ丸側）に折れ曲がる内折れ式の構造でした。古い時期の土塙が倒壊したため、新しく新築したことが伺えます。

山形城の城絵図には土塙上に土塙が描かれていますが、屏風折れが所在したような描画が確認できるものはありません。今回検出された屏風折れ土塙が、いつの時期に何の目的で築いたのか、今の段階では不明です。

他の城郭では、城絵図に屏風折れ土塙の記載があるものは存在しますが、遺構として現存している事例は存在しておりません。今回、山形城で検出された屏風折れ土塙は、全国的に見ても非常に貴重な遺構です。